

放課後の子どもたちの本音とその課題

植 木 信 一

1、中越沖地震発生直後の支援活動から

2007年7月16日午前10時すぎ、9階にある私のマンションが左右に大きくゆれた。中越沖地震の発生である。休日だったが、急遽勤務先の大学へ行き、所属する専攻学生の安否確認を行う緊急作業なかで、中越地方の被害の大きさをあらためて知った。

自分には何ができるのだろうかと考え、とにかく現地へ行って何でもさせていたこうという結論のもと、直後の週末、柏崎市内のA地区を中心に力作業のボランティアを行った。避難所になっているB小学校では、学童の姿を多く見かけたが、どの子どもも友だちと一緒にいて、努めて明るく気持ちを保とうとしているよ

うに見えた。

次の週末は、そのB小学校で再開された放課後児童クラブの子どもたちを対象に遊びの支援を実施した。そこで確認したことは、放課後児童指導員自身も被災し、とにかく安全確保を最優先にするなかで、夏休みの行事やプログラムを縮小せざるを得ない状況にあることであつた。

過度なほどに甘えてきたり、または逆に攻撃的なようすを見せる子どももいて、それぞれの方法でストレスを発散していたのだろう。いずれにしても、一人だけにいる子どもは皆無だった。むしろ「もつと私に関わって」「そして安心させて」と言っているようであつた。

2、友だちがいると幸せになれる

やはり「不安」なときほど、「関わる」ことで、子どもたちは「安心」を確保しようとしているのだと確信した。少なくとも夏休み期間中は、ボランティアの行き届きにくい放課後児童クラブを中心に、できるだけ遊びの支援に出かけようと急ぎよ計画しているところである。

さて、ベネッセコーポレーションが、2006年に発表した「学習基本調査」によると、社会観に関する問いで、「いい友達がいると幸せになれる」と答えた小学生・中学生は、いずれも9割を超えたという。高校生においては、さらに高い96・3%に達している。ほとんどの子どもたちが、友だちとの関わりを幸せの拠り所として感じていることがうかがえる。

しかし一方で、「日本は努力すれば報われる社会だ」と答えた小学生は68・5%、中学生54・3%、高校生になると45・4%と、学年が上がるにつれて「あきらめ感」が拡大しているようすがわかる。

また、NPO法人ジェントルハートプロジェクトが、2006年に発表した調査結果によると、「いじめの方

が悪い」と思っている小学生は6割を超えたが、中学生・高校生は4割台だったという。同じ調査で、「いじめられても仕方のない子はいるか」の問いに、「いいえ」と答えた小学生は過半数を超えたが、中学生では4割台に留まったという。

友達との「信頼」を求めながら、一方で「あきらめ感」を抱かねばならない子どもたちの心の叫びが聞こえてくるようである。

逆に、ストレスが蓄積すればするほど、人と人とのつながりや信頼を求め拠り所にする子どもたちのエンパワメント（自己肯定感の発揮）の存在を確認することができ、やはり子どもには力がないのではなく、本来持っている力を上手く発揮できずにいる環境条件下で、結果的にストレスを溜めざるを得ないのだとあらためて確認することができる。

3、放課後の子どもたちの本音

現在、私は、子どもたちが自由に利用できる電話回線で、悩みがあってもなくても利用できる、子ども専用何でも電話「チャイルドライン」という活動に関わっている。子どもたちが電話をかけてくるのは放課後

である。放課後の子どもたちの本音が聞こえてくる。

電話をかけてくる子どもたちのなかには、自分の話を聞いてくれる相手にやっと出会えたようなようすを見せる子どもが少なくない。なかには、電話回線をつながっている話し相手のスタッフを独り占めしたくて、何度も何度もかけてくる子どももいるほどである。

そうした子どもたちは、おそらく、これまで彼らの話を真剣に聞いてくれる大人や友だちが、ほとんどいなかったのだろう。あるいは、大人や友だちが周りにいたとしても、いつもはぐらかされ、真剣に聞いてもらえた経験が少なかったのかも知れない。

子どもたちには、短時間でも真剣に寄り添う「継続的な経験」が必要である。「誰も自分のことを真剣に心配してくれない」という感覚の積み重ねは、「不信感」につながり、実際そのような不信感を抱えながら生活している子どもたちの本音を聞かざるを得ない。

「この大人はたして信用できるのだろうか」という感覚で、私たち大人は見られているのである。それでも「もしかして聞いてくれるかも知れない」という期待を持って関わってくる子どもがいるとすれば、私たち大人は、その期待を裏切ることではできないだろう。

むしろ「一生懸命あなたの話を聞いているよ」という態度で寄り添うことが、子どもたちのわずかな望みをつなぐ筈になるのだと思う。

4. 「自己肯定感」の回復

先ほどの調査結果と同様に、学年が進むにつれて、「あきらめ」感を募らせる子どもたちが増えていると実感することがある。チャイルドラインでは、イジメに合い、あるいは周りの友だちから意識されることもなく、自分自身の存在を全否定し、「もう自分なんて生きていても生きていないのも同じだ」と話す子どももいる。寄り添おうとすると「おまえは偽善者だ」とののしられることさえもある。

おそらく彼らは、これまで自分自身の存在を認めてもらおうと何度も試みてきたのだろう。しかしことごとく打ち砕かれ、「あきらめ」感を蓄積してきたのではないだろうか。「生きていないのも同じ」と言い切る子どもたちの感覚は、「虚無感」に近いものであり、その「虚無感」は、「自己否定感」につながるものである。そのような子どもたちが、最後の望みをかけて私たち大人に関わってくるのである。「おまえは偽善者だ」

とのしりながらも、わずかな望みを捨てきれないからこそ、彼らは関わりとうとするのだと思う。そのような子どもたちの心の叫びに、「彼らを絶対に見捨てない」と心から誓うのである。

「自分の話しに寄り添ってくれた」という感覚は、「あきらめ」から自分自身を引き戻し、「自己肯定感」を回復するキッカケともなる重要な経験になるのではないだろうか。

子どもたちの「自己肯定感」を回復するということは、「安心して自分の本当のこと」を伝えることができ、「自己主張ができる」ための力をつけるということである。それこそが「自立」なのだろうと思う。

5、無理をしなくてもいいよ

さて、本原稿を執筆しながらも、後日うかがう被災地のC放課後児童クラブにおいて、どのようにプログラム展開しようかと考えている。子どもたちは、おそらくさまざまなサインを訪問する私たちに向けてくるだろう。本当は不安で泣き出したいギリギリの気持ちで笑顔を向けてくる子どももいるに違いない。

「大丈夫だよ、そんなに無理をしなくてもいいよ」そ

のような気持ちで、関わってこようと思っている。

(うえきしんいち・県立新潟女子短期大学)



訂正

前号(九〇号)の49頁上段1行目の「や全国一斉学力テスト」の部分を削除します。正しくは全国一斉学力テストには52%が賛成、36%が反対でした。お詫びして訂正致します。

(編集部)